

北海道大学総合博物館

ボランティア・ニュース No.18

2010.9

新館長挨拶

「温故知新」と北大総合博物館



総合博物館館長 松枝大治

博物館ニュース 21 号にも書きましたが、論語の中に「温故知新」(古きをたずねて(あたためて)新しきを知る)という言葉があります。これは、為政の「温故而知新、可以為師矣」(古い事柄も新しい

事柄も良く知っていて、初めて人の師となるにふさわしい意)に由来する熟語で、昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識を得ることを意味しています。この故事は、しばしば博物館の存在意義や役割としてもしばしば引用されていることはご存じのことと思います。

博物館は不変で多様な可能性を秘めた貴重な標本を収蔵管理し、広く研究教育のみならず人間社会に貢献することが重要な使命と役割の一つです。特に大学における様々な標本や資料等は、それまで研究者が学術的に研究し、その折々の最先端的知識と手法・理論を駆使して多大な成果を得た基礎になったものです。しかし、昨今の大学等の研究機関では業績偏重主義やデジタル化重視の影響もあり、関係研究者が定年退職や転出などによって不在となった時、残されたそれらの貴重な標本や資料類は極端に言えばごみ同様の扱いを受け、しばしば廃棄の対象となって世の中から姿を消してしまっている現状があります。このことは、学問にとって最も基本的で重要な“継承性”までもが失われかねないという由々しき事態を招いています。過去の遺物であってもその実物(標本)さえあれば、新たな知識や手法・理論を基にさらに新しい研究成果・情報が得られる大きな可能性を孕んでいます。一例として、私が関わる資源科学関連分野では、有用元素・鉱物を含む鉱石はその特性から殆どが既に消費されたり廃棄されたりしていることに加え、鉱山での採掘活動終了や社会経済状態の変化に伴う鉱山の休閉山などにより改めての標本採集がほとんど不可能となり、博物館や研究室等に僅かに残された過去の標本のみを用いて細々と研究がなされているのが現状です。しかし、その研究成果として近代文明を支える新たな資源物質や希元素(レアメタル)の発見

と存在状態の確認、またそれらの抽出法や新用途の開発・研究等が相次いでおり、改めて過去の標本の重要性が見直されています。身近な例として、そのほかにも金(Gold)元素のように、古い時代には宗教的な意味で珍重された金が、その後蓄財性や金本位制の導入と絡み次第に財産的な価値が求められるようになり、今やパソコンや携帯電話を始めとする IT 機器には不可欠の元素として注目されるようになってきた事実があります。

このような傾向は他の分野でもほぼ同様であろうと想像されます。従って、目的に応じた適正な標本提供のためには、博物館における標本の分類・保存管理などの地味ではあるが、基礎的な研究や作業が不可欠であることは言うまでもありません。前述の博物館ニュースでは、「温故知新」の故事に加えて『奥の細道』で知られる松尾芭蕉の俳諧用語の「不易流行」という言葉も引用しましたが、「不易」の意味する永遠性(不変性)と「流行」の意味するその時々の新風の体は、根元においては同一(真実は一つ)であるという意味ですが、標本(モノ)こそが真実の語り部であり、無限の可能性を秘めた貴重な“お宝”であると言えます。

北大総合博物館は、設立以来これまで「モノにこだわる」をモットーとして、「標本」の重要性を強く意識した博物館の運営や教育研究その他の活動を展開して来ました。このことは、北海道大学の学風に通底する精神としての物的証拠に基づいた実証的(実学的)な教育研究、ひいては人類・社会貢献につながるものと固く信じています。

博物館が材料(標本)の集積・保管の場として不変であることは言を待ちませんが、単にコレクター、ストックハウスや標本提供・管理機関としてだけでなく、標本を最も評価できる自らが研究教育に活用し、情報発信できる環境を整えた博物館へと転身して行くことが望ましい姿と考えています。しかし、博物館構成メンバーの陣容や施設・設備は決して満足の行くほど充実されたものではなく、その期待される機能を十分に発揮するためには程遠いというのが現状です。言い換えれば、博物館ボランティアの方々のご協力無しには、北大総合博物館本来の目的や使命・役割の達成

が著しく困難であることは言うまでもありません。卑近な例では、この春にマスコミでも大々的に公表されましたように、寺西さんを始めとする博物館地学ボランティアの方々のご尽力により、「北海道で二番目に古い岩石標本」の貴重な発見がありました。これは、貴重な標本の発見ということだけにとどまらず、北海道ひいては日本の地質学の発展史を考えて行く上でも極めて貴重な発見となりました。

今や博物館は知の交流の場であり、生涯学習の主な舞台になりつつあることを強く意識する必要があります。また、ヴァーチャルではなく、実証的教育研究の

中心的な場としての博物館の使命・役割と存在意義を踏まえ、北大総合博物館は「智の蓄積」から「智の共有」へ、そして「智の創出」の場へと進化する博物館を目指して行きたいと考えています。

北大総合博物館は開館以来12年目を迎え、これまでの長くもあり短くもあった10年余りを振り返りながら、これから次の10年、さらにはもっと将来を見据えて新たなスタートを切りました。この重要な節目の時期を迎えた北大総合博物館に、是非ボランティア関係者の皆様の深いご理解とご協力を得られれば幸いです。

特別寄稿

松村松年先生小伝

昆虫学者をめざす(その2)

蝶の採集に明け暮れて、川口英和学校を退学させられた松村少年は、ちょうどそのとき次兄の東京への移転があり、兄に伴って東京の明治学院予備校に転学した。その理由が「兄の監督の下でなければ何をするか判からない」というのである。しかも東京では蝶の採集は厳禁であった。この予備校で一年を過ごしたころ松村少年に思いがけない話が飛び込んできた。兄の友人で札幌農学校出身の和田健三氏から、日本の新天地北海道に設立された札幌農学校を目指したらどうだろう、という提案である。この提案に迷った様子は微塵もなく、これを受け入れた心情を自伝には次のように記している。「その頃北海道といえはまるで外国へでも行くように考える人が多かったが、なにものかをつかもうとして、青雲の志に燃えていたわたくしには、それほどのことにも感じられなかった」と。明治20年(1887年)松村少年16歳のことであった。

札幌へ移って一年後、1888(明治21)年に札幌農学校予科3級へ入学、1895(明治28)年、若干23歳で札幌農学校農学科を卒業した。しかし、この間も決して順調ではなかったらしい。予科時代の腕白ぶりは自伝に詳しいが、本科に移るときにも一騒動があったという。数学がよく出来た松村青年は、工科の先生たちから薦められて漫然と本科では工科に籍をおくことになった。これは、貧しい家計を助けるためには土木工学が将来のためになるだろうという、故郷の家族からの願いでもあった。何日か工科の授業を受けているうちに、これは自分の望む道ではないと悩みだした松村青年は、かなり迷った末に工科をやめて農科に進みたいと学校に申請した。当時も進路を変更するのはなかなか大変だったらしく、それを知った工科の先生方は大変な立腹ようで、松村青年は3ヶ月の停学処分を受けたという。停学が明けて農学校に戻った松村

総合博物館資料部研究員 久万田敏夫

青年は、迷うことなく農科に転科、希望の昆虫学の勉強にまい進することになった。

当時日本では昆虫学はまだ揺籃期で、農学校には専門の先生がおらず、養蚕学や動物学の先生方からその一端を教えられる程度で、すべて独学で勉強する以外に方法がなかったという。その際、先生方の昆虫学に関する蔵書が大いに役立った。しかもそのほとんどは欧米の研究者によって書かれたいわゆる洋書であったため、少年時代の外国語の勉強が大きな助けになったことは間違いない。

昆虫学ではまだご飯が食べれない時代であったが、願い出て研究生となり、その翌1986(明治29)年に札幌農学校助教授となり、日本の高等教育機関に初めて昆虫学の講座が開設されることになった。当時はやっと農務省に付属の農業試験場がもうけられ、農業害虫の研究が開始されたばかりの時である。

ドイツ留学

松村先生は学生時代すでに昆虫に関する処女論文を発表していたが、助教授になってからは矢継ぎ早に多くの著書を出版した。なかでも1898(明治31)年に出版した「日本昆虫学」は今見ても出色の文献である。昆虫学を志した学生時代、勉学に役立つ日本での出版物がなくて苦労した体験から、このような著書の必要性を痛感していたのであろう。



松村松年著
「日本昆虫学」
中表紙

初版は1898年発行であるが、これは、1900年発行の増訂3版のもの

翌 1899(明治 32)年、先生は文部省からドイツ留学を命じられた。まだ留学生が少ない中で、昆虫学に関する留学生は初めてであった。その辞令によれば、害虫の駆除方法、益虫の保護方法、および養蜂論の研究が主要なテーマであった。ドイツに着いて3日目に、日本大使館駐在の海軍少佐と陸軍大尉が軍服姿でベルリンの下宿に来訪し、「この多忙で多端な時代に虫ケラなんか研究する人間を、政府はよくもドイツまで留学させたもんだ。その理由を説明してもらいたい」と難題を吹きかけられたという。これとよく似た話を筆者は学生時代に誰かから聞いた記憶がある。それは第2次世界大戦中のことで、「この戦局多難な時にノミのキンタマを研究している学者がいる。非国民もはなはだしい」と、京都大学のある先生を非難した事件である。昔も今も、昆虫の研究は何の役にも立たない道楽学問と思われているらしい。かくいう筆者が昆虫学講座に進学したときも、貧乏な中で大学へ入れたのに、よりによって金にもならない昆虫学へ進むとは何たることか、と両親に嘆かれた経験がある。

松村先生はそのとき2人の軍人に、現在の日本の米の産出量を問い、知らないと答えた2人に対して、「日本では今日約5千万石の米が取れます。ところがそのなかの2割か3割が害虫のためにやられてしま

います。これを駆除して予防すれば軍艦の1艘や師団1つ位はわけなく出来るでしょう」と説明したところ、2人の軍人はやっと納得し、最後にはお互いにしっかりやろうと握手をして別れた、と自伝に記している。しかし、日本ではすぐ役立つ学問ばかりに目が行き、いつ役に立つかわからない基礎的学問には研究費がつかないという現実、今も続いていることは確かである。

結局、松村先生は2年間をドイツで、1年間をハンガリーでイネの大害虫を含むウンカ類の研究を重ね、帰国前に東京大学に提出していた学位請求論文「日本産ウンカ科の研究(ドイツ語)」により、帰国直後の1903(明治36)年に理学博士の学位を受領した。それまでの博士号はすべて推薦によっていたため、論文に基づく博士号はこれが最初であったという。ちなみに後年松村先生の農学博士の取得は、推薦によるものであった。

* 前回「小伝」で、退官の年代を1932(昭和7)年としたのは、1934(昭和9)年の誤りでした。訂正します。

つづく

活動報告・他

樺太一戦争、抑留、帰国、研究へ

私は青少年時代から学校そのもので軍事教育に浸り、その後の10年間の従軍とシベリア抑留を経て、今でもその尾を引く生活でいる。昭和6(1931)年中学入学(今の岩東高)。廊下には鏡が並べられ配属将校がおり、いつも軍事教練や演習があった。この年は満州事変で、5年後の2月大学入学で上京、26日赤坂の目前で2・26事件に出会った。それから5・15事件、ノモンハン事変、張鼓(ちょうこ)峰事件、張作霖暗殺、そして支那事変へと。事変とは戦線布告のない戦争のことであった。国民総動員として経済も文化もすべてが戦争へ動員された中で私は青少年時代を送った。

私は国の指導を疑わない人間だったので当時の文部省推薦学生(?)となり大陸視察等にも派遣されたが昭和15(1940)年大学卒業、翌16年1月に歩兵第25野戦隊に入隊(23歳)。稚内より大泊に渡り長い汽車旅の末に上敷香到着。そこは驚くような軍事基地になっていた。間もなく軍のテストがあり、図らずもトップ合格となったのが出発点となって予備士官学校へ入り、やがて少尉任官と同時に連隊旗手という最高の立

化石ボランテイア 石橋七朗

場に立つこととなった。戦時特例で5段階上級職となり、教育作戦など、北は北緯50度の国境から樺太南端までが担当となったがすべてを見られるものでなかった。



連隊旗手時代の
石橋さん

国境の境界石は一度だけ手でさわったことがあったが、当時の松岡洋祐外務大臣がスターリンと結んだ日ソ友好中立条約があったし、当時西方重点のソ連軍勢力であったので、内心は不安感があるような無いような状態であった。その間に豊原の北の大木(おおき)に2000メートルの飛行場を作ったり、気屯の北の

半田澤に深さ 10 メートルの対戦車壕を大軍動員し手掘りしたり、不安と平静の交じる毎日であった。

国境守備のため、もうひとつ歩兵第 125 連隊が置かれたが、すでに兵器が足りず極めて情けない状況であったが、これはソ連軍南下の時、すさまじい被害を受けた。

5月にドイツ軍敗北後、ソ連軍は一斉に満ソ国境、樺太国境、千島へと大移動し一斉に暗号改変。この時はすでに日本海軍は全滅しており、こうして8月を迎えた。

私は特命を受けて5月から旭川に来ていたが、それからは大変であった。8月3日モロトフ外相は、まだ1年ある日ソ中立条約の破棄を一方的に通告してきた、6日に広島原爆、9日長崎原爆とソ連軍攻撃開始となったのである。私は次の10日に北部軍総参謀長酒匂純夫少将に会い旭川で曹長の特命を受け、13日稚内から大泊へそして樺太軍鈴木参謀と会談。この時ソ連軍はすでに南下し空爆もあった。

この時私は本部を外され南方の対戦車砲隊長を命ぜられ南下したが、結局また北上とわずか30余名を率いて豊原一真岡間の峠上の駅に立てこもり西岸よりの攻撃に備えたのだがこの近くの宝台に配置された第3大隊は全滅し川上炭鉱に逃避した。私と30名も最後の覚悟を固めた30分の間に日ソ両軍の将校たちに終戦といって救い出される危機一発の時だった。こうして山頂から部隊に戻った。

死んだような赤ん坊を背負い飯盒(はんごう)ひとつ下げて逃げてくる女や子供たち、その後戦場掃除、そして真岡の屍体片付け、多くは自殺してしまった女性交換手の残りの人たちと握手、その後東京ダモイ(帰る)にだまされて貨物船で私と500名は沿海州のポルトワニノ港に連れられた。それが5年間ヴァム鉄道(ワニノ~アムール間)の建設労働に。往けども往けども白樺林だった。

食料の入手、自殺予防など、毎日がソ連側との争い

と交渉の連続であり、どうしたら健康、協力心で日本帰国の日を待てるかが最大の課題で正に人間大学の研究でもあった。昭和25(1950)年12月末、夢にまで見た日本へ、舞鶴へ2000名の将兵とともに静かに帰国したが、私たちを待っていたのは「シベリア帰り」と色目で見、公安警察の調査と、私は軍の上層としてC級戦犯、公職追放。預貯金封鎖とインフレ政策で無一文、無収入となった。

たまたま地方の中学校教師の話があり止むなく教壇に立ったという様であった。これが逆に当時北大地学の勝井義雄教授、吉崎昌一教授、札教大木村方一教授たちとの共同研究の始まりとなり、白滝団体研究会、十勝団体研究会の活動研究を進めることができた。白滝では黒曜石の山・石器製作場の発見、そして段丘上に50cmほどの穴を掘りそして石器を割っていた跡など、これまでの空想的な学説をことごとく破ることができた。博物館3階の石器群の陳列を見るときなにか身近で当時スウェーデンまで送って14C年代測定で13800+-400年前ウルム氷期の石器と分かった時の驚きは今でも昨日のこのように思われる。

どんな人間が大陸から北海道に来たのか、まだ未解のままだが、然別の石器作成大アトリエの再調査などこれからであろう。

ところで話は戻るが10年ぶりに祖国日本に着いて知ったことは、独り息子の帰りを待っていた父が5ヶ月前に病死していたことだった。結婚2週間で別れた妻は5年間陰膳(水と白いご飯)をすえて待っていたが私は全くの無一文だった。

私は近・現代史の真実を学びその反省に立ってよい日本社会を作りよい人材を一人でも養えないかと思っている。思いつきそのまま記憶だけで書いたので誤字脱字、順序違いなどもあるかもしれないが、地位、肩書き、名誉など一切捨てて誠意を失いたくない願いで、この余生を終えたいものです。

平成22年8月6日広島原爆記念の日に

UUUUUUUUUU「第17回ボランティアの会談話会(7月2日)でお話しさせていただきました」

今回「考古学からわかること 発掘調査の実際」というテーマで、考古学と発掘調査についてお話する機会を頂いた清水香です。私は現在、國學院大學大学院文学研究科博士課程後期に在籍し、擦文・アイヌ文化期の木製品を研究しています。今年5月から北海道に住み、北海道大学埋蔵文化財調査室の発掘調査に参加しています。これまでは、年に数回、東京から北海道にやってきて資料を見学していましたが、物質文化を理解するためには、その土地に住む人々、文化、自然環境を実感することがなにより大切なので

北大埋蔵文化財調査室 清水 香

はないかと思っていました。このことも北海道に住むことを決心した理由の一つでした。

私は地方の小さな村で育ち、若者らしく都会に憧れ、高校を卒業した後すぐに上京しました。そこで、アルバイト情報誌に掲載されていた「遺跡の発掘調査」を仕事として選んだことが、考古学の道に進むきっかけになりました。それから10年間、いろいろな発掘調査の現場で「遺構を掘る、遺物を検出する、それらを記録する」という考古学調査の基礎を学んできました。また、登山や外国旅行に出かけたりもしました。

初めての外国旅行は、ウラジオストクからモスクワを経由し、北欧のノール岬からスカンジナビア半島を南に向かい、東欧、中近東、エジプトに至る3ヵ月半という大旅行でした。博物館や美術館、史跡では日本とは違った歴史によって育まれてきた文化、そして、その文化を基礎としながら生き続ける人々の生活を感じました。この経験を通じて、私は「異文化」へ興味を持つようになりました。

発掘調査の仕事始めて10年、不景気から現場の仕事が途切れた時には、北海道の牧場で働きました。このことも、現在の私と関わる大切な経験でした。1年半後に再び東京に戻り、友人の勧めもあって遺跡調査会で働くことになりました。そこでは、区の教育委員会の学芸員、大学で考古学を学び現場経験を積んだ調査員、考古学専攻の学生などいろいろな立場や境遇の人々が一緒に遺跡調査、遺物の整理作業をし、遺跡について考え、その成果を報告書としてまとめていくという恵まれた環境がありました。毎日の仕事が楽しく、実際に遺跡や遺物を見ていくうちに、もっと知りたい、調べたいという気持ちが強くなっていきました。この時の私には、大学で勉強するなど思いもよらないことでした。当時、30歳だった私にとっては、そんな歳で大学に入ることが非常識だと思っていましたし、なにより学費が払えるような状況ではありませんでした。しかしそんな時、友人から社会人入学という方法、奨学金制度のことを聞いて、試験を受けることを決めました。そして國學院大學に入学、学部、大学院と進みました。研究はもちろん、発掘作業や報告書作成に関わる仕事が好きだからでしょうか、辞めることは一度も考えたことがありません。

卒業論文では、縄文時代の木製品の樹種について研究しました。研究の結果、縄文時代から木の種類を選んで道具を作っていることがわかりました。けれども、縄文時代における樹種選択は木が硬い、柔らかいといった理由だけだったのかどうかについては明らか

かにできませんでした。考古学では当時の人の考えを復元することはとても難しく、証明は不可能かもしれません。現在の研究テーマである擦文・アイヌ文化期の木製品を選んだ理由は、アイヌ文化を理解したいという気持ちが強かったことがあります。そして、北海道を対象にしていた研究者が身近にいて、調査の話聞くことが出来たこと、木の道具に関するアイヌ文化の伝承が残されていることから、木の道具と文化を合わせて考えることで、アイヌの木に対する「考え」や「思い」を復元する手がかりを得られるのではないかと思ったからです。最後に、なぜ遺跡を調査しなくてはならないのか、という問いに私が答えるとすれば、今の人々が生きているのは、過去の人々から受け継がれてきた命や知恵、さまざまなものがあつたからだと思っています。それらについて、全てが文字や写真によって残されているわけではありません。そういった記録に残る事柄はごく一部であり、普通の人々の生活の痕跡のほとんどは消えてしまいます。ちょっと前の時代、数十年前には、火打石で火をおこし、かまどで煮炊きをしていましたが、今の生活からは想像し難いものになっています。このような過去の人々の歴史を、次の世代に伝えることは、未来の人々がよりよく生きていくための支えとなるのではないかと思います。

そのため、発掘調査が必要であると言えます。考古学は過去の人々が残した痕跡、遺跡や遺物を研究する学問ですが、それには人類の歴史、とりわけそれらを残した人間について知ることが大切なのは言うまでもありません。私が考古学を学んで良かったと思うのは、人に興味を持つこと、考古学を通して社会と関わることが出来ることだと思います。学校へ入る前の私は、このように人前でお話させていただくなど想像も出来ませんでした。今回お話を聞いてくださったみなさまにも、身近なところから考古学に興味を持っていただけたら幸いです。

カルチャーナイト 2010

札幌のカルチャーナイトは2003年から始まり総合博物館は翌2004年より参加している。今年の統一テーマは“たからもの”とのこと。今年も展示延長公開はもとより、チェンバロコンサート、プラネタリウム上映、4Dシアター上演、そして館外南ローンでの観望会と企画した。梅雨を思わせるような雨模様となり、館外の観望会は中止せざるを得なかった。浴衣姿で出迎えるスタッフも好演出でありなかなかのもの、がその雨の中、16時30分より21時までの間に親子、カップルなど160名を超える来訪者があつた。博物館の先生を始め北大天文同好会、市民の札幌星仲間も参加し、我

展示解説・平成遠友夜学校ボランティア 石川 満寿夫



らボランティアもチェンバロ、4D、展示解説メンバーを始めとし30名余が設営準備、運営補助、後片付けなど下働きを担っていた。各企画は定員を超え空席待ちの場面も発生していた。プラネタリウムや4D等では20時を回る上演にも親子連れが目立ち目を輝かせて会場を出てくる子供の姿が印象的であった。市民と大学のふれあい、特に幼少期にこのように身近に総合博物館があり、足を運び時空を超える恐竜や天文の世界を体験することは、夢、将来のやりたいことへの創造形成に役立つことと思われる。ところでボランティアの皆さんは最近のチェンバロ、4Dシアターを実際に聴いたり見たりしましたか、内容も増えなかなか聴きごたえ、見ごたえのあるものですよ。4Dシアターの学生スタッフによる掛け合い解説はレパートリーも増えており演劇を目指している俳優の卵

北海道大学に魅了された私

私は遠友夜学校に通う様になって早いもので6年程になります。クラーク講座にも北大の歴史が知りたくて3年通いました。遠友夜学校に通い人間関係にも少しですが自分は成長することができました。北大の歴史を知りたかったのでいろいろの講義を聴いて自分を成長させることが出来たと思っています。

社会生活の頃は、毎日が数字との生活で数字が頭から離れず机上にメモ紙を置き、その日その日で合わない数字を探すことで悩まされて毎日が過ぎていたように思います。現在でもソロバンや電卓を離さずに置いている生活です。

私にとって遠友夜学校は忘れられない思い出を沢山作ってくれたところであり、すばらしい所だと思っています。私に北大のことをいろいろと教えてくれたのは父方の従兄弟です。従兄弟は男ばかりの6人兄弟で、私も6人姉弟です。従兄弟は北大の文学部を卒業後高校教師となり結婚して2人の子供にも恵まれたのですが40歳代後半に心不全であっけなくこの世を去りました。亡くなった事を知ったときは本当に驚きまし

「知の交流」コーナーで紡ぐバロック音楽の織物

チェンバロボランティアの活動では、博物館1階南側の「知の交流」コーナーに置かれたポプラ・チェンバロが主人公です。5月に来札されたチェンバロ制作家の横田誠三氏が「いつも娘がお世話になっています」とおっしゃるので、お嬢様、あるいはお姫様ということになります。このお姫様、気温や湿度に大変敏感でおられ、天候が不安定だった春頃には決まって高音の

とさえ思わせるもので、無料ではもったいない内容と思います。

カルチャーナイトの開始前に図書ボランティアのお茶休憩に飛び入りしてしまいました。他のボランティア活動のメンバーと談笑するのもたまにはいいのもですよ。それぞれが違う活動内容を知りメンバーとの談話を通じて相互理解が深まるかもしれませんね。

我らボランティアの活動は決して華々しいものではないが、市民の中に根ざす大学、文化の発信地のひとつとして北海道地域の貴重な存在としての総合博物館の活動の一端を担っていることを誇りとしようではありませんか！

我らの無形の“たからもの”として大切にしたいものがありますね。

北大の歴史展示ボランティア 石黒弘子

た。今でもその時の心の悲しい気持ちを忘れることができませぬ。その従兄弟が学んだ大学と思うと北大は懐かしい場所です。

クラーク先生は8ヶ月ほどしか北大にいらっしやらなかったのにクラーク先生が残された教員が130年以上たった現在も息づいていることが素晴らしいと思います。クラーク先生が残してくださった宝物が博物館に沢山残されています。札幌市の有名な時計台も札幌農学校時代から120年以上もたった現在でも鐘を鳴らし続けています。

豊平区の羊ヶ丘ではクラーク先生の銅像の指は北大の方向に向かって指をさしておられます。クラーク先生が残してくださった「フロンティア精神」は今も北海道に生きています。素晴らしい北海道大学。札幌市民が心から愛している大学にいつまでも幸あれと心から願っています。応援してあげたい。そのような思いから北大博物館のボランティアとしてお手伝いしていきたいと思っています。

チェンバロボランティア 谷川千佳子

C#、E、F#あたりの音がすぐに狂ったり、弦が切れたりとか機嫌斜めな日が続きました。生みの親に手当をしていただき、またボランティアの新妻さんが主体となってメンテナンスの技を伝授していただいてから、本当に愛情を注ぎ続けてようやく安定した豊かな音色になってきました。

ポプラ・チェンバロはかように貴族気質なのですが、

様々なチェンバロボランティアによって様々な作品を演奏するにあたり、頼もしい働きをしてくれます。フレンチ・バロック作品の F.クーランを奏でればリヨン産絹による複雑な蓮・柘榴・百合の文様織物が、イタリアで学んだヘンデルの作品を奏でればベルベットに絹糸のレースが目に見えびます。またそれらの音の糸をいかに紡ぐかは私たちチェンバロボランティアの力量にかかってくる、ということになります。そのため博物館閉館後に練習をさせていただき、毎週のミニコンサートや年に3～4回もっている「ポプラ・チェンバロ演奏会」でご披露しております。去る8月29日にも8回目の演奏会を持ち、バロックトランペットやバロックヴァイオリン、声楽、リコーダー演奏家を従えてポプラ・チェンバロ姫様はご活躍なものでした。おかげでアラスカの恐竜の尻尾もピクリとしたでしょうか!? 今後ともご協力ご声援のほどよろしくお願いいたします。



チェンバロボランティア統括の天野先生と仲間たち

コラム（序）

私は職業柄、大規模開発公共事業の基礎調査にかかわることが多く、地方都市、とりわけ山間部の地域へ出張することが多く、学校を卒業してから10年足らずで、東京を拠点として、ほぼ全県に足を踏み入れました。その後、約15年間では、札幌を拠点とし、ほぼ北海道内全域を、同じようにして回りました。さらにその後、約20年間では、海外に足を伸ばすこととなりました。政府開発援助(ODA)の仕事で、渡航先は、いわゆる開発途上国といわれる国々です。渡航した国は、航空便の乗り換えのために入国した国を入れれば約30カ国となります。

1度の出張で、国内の場合は数週間から1ヶ月、海外の場合は1ヶ月から数ヶ月間滞在することが多かったように思います。1度の出張で、一番長い滞在期間は、国内で3ヶ月、海外で7ヶ月だったと思います。ど

=====

コラム（1） 「微笑みの国 タイ」

1981(昭56)年、私は初めての海外旅行でタイに行きました。業務出張でした。当時のバンコク国際空港(ドンムアン空港)の施設は、木造の掘っ立て小屋のような建物だったのが印象的です。

表題のキャッチフレーズのように、タイの人々は、いつも親切で、やさしい人々でした。しかし、タイと長い付き合いのある人からは、タイの人達は執念深いところがあるので、恨みを買うような行動はしないようにとのアドバイスもありました。そのことと関係するののかどうか分かりませんが、当時、地方首長選挙などがある

ボランティア・ニュース編集部 安田 正

ちらの場合も、あるひとつのプロジェクトで、また、別のプロジェクトで同じ国、地域に何度も行くこともしばしばでした。

以上のように、国内外の地方部に、長期間滞在することを通じて、ことば・風俗・習慣等の違いによる、いわゆる異文化に接することとなり、そこに驚き・喜び・感心・納得等を見出し、自分の生活を反省させられることともなりました。

今後、ここにコラム欄を設け、折に触れて、主にこのような異文化体験のいくつかをご紹介したいと思います。特に系統立ててということはありません。国内外を問わず、思い出すままにご紹介していきたいと思えます。また、どなたでも異文化体験にこだわらず、身近な話題についての投稿があった場合には、その記事を紹介していきたいと思えます。

化石・地学ボランティア 安田 正

と、ある陣営の要人が射殺されるような事件を何度か耳にしました。また、中央政府を舞台にしては、最近もありましたが、王政を覆すような絶対的なものではないにしても、軍隊を巻き込み、時の政権を交代させるような「革命」も何度かありました。このような事件は、タイの人々にも気性の激しい面があることを表しているのかもしれない。

当時、タイでは政府開発援助(ODA)に関わる多様な、多くのプロジェクトが同時並行的に実施されており、他のプロジェクトに従事する他社の方々とは情報交

換などの名目で、同じ日本人同士で、時々飲食をともにすることもよくありました。

ある時、私は他社のスタッフで、旧知のAさんと出会い、夕食をともにすることとしました。Aさんは、同僚のBさんとともに現れました。Bさんは30歳代半ばの若い方で、私とは初対面でした。その時は、楽しく談笑し、別れました。それから間もなく、私は帰国しました。帰国後2週間ほどして、ある朝、新聞に目を通していると、なんとBさんがバンコクの街中で何者かによって射殺されたとの記事を目にしました。Bさんの顔写真付の記事でしたが、それ以上の詳しい記述はありませんでした。衝撃でした。

やや暫くしてから、その後帰国したAさんと会う機会があり、事件の様子などを聞きましたが、何か個人的な問題がタイ人との間にあったのではないかという以外には、何も分からず。結局、犯人が捕まったと言う話も聞いていません。ただ、生命保険嫌いのBさんが、どうゆうわけか、その海外出張の前に、保険を契約していたと言う話を聞きました。

海外の生活では、常に自分の身の律し方が大事であると思わせられる事件でした。



タイの農村風景

編集後記

ボランティア・ニュース18号をお届けいたします。今回も、沢山の投稿をいただき、17号につづき8ページ仕立てとなりました。今回は、「松枝新館長の挨拶」の寄稿、石橋さんの終戦の夏にふさわしい体験記、北大埋蔵文化財調査室の清水さんの談話会でお話いただいた内容のまとめ記事などが、特筆すべき記事となりました。

以下、編集部員からの一言コメントです。

- * 今年記録にない暑い日が続きバテ気味の今日この頃です。多くの皆様のご協力によりましてボランティア・ニュース18号の発行にこぎつけることができました。このことについて心より感謝しています。(星野)
- * 記録的な猛暑の夏、17号に続き、8ページ仕立てで本ニュースを発行する運びとなりました。集まった多くの原稿に、原稿を集める苦労、編集・紙面構成の会議の苦労も報われます。(沼田)
- * 今まで訪ねた博物館や美術館の紹介、面白かった所など800～1000字くらいで博物館探訪記を募集中です。私が今年訪ねた博物館の一押しは「小樽市総合博物館」。SL体験乗車では、本物の機関車が汽笛を鳴らして100を往復し、連結するところや転車台から機関庫に格納されるまでを見ることができました。50数年前の修学旅行を思い出し、懐かしさもよみがえりました。(永山)
- * 事務局および編集委員会では、皆さん多くの方の参加をお待ちしています。通常のボランティア活動の延長と考へ、気楽に参加してください。
- * ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。
- * 昨年11月10日 ボランティア室に電話が設置されました。番号は011-706-4706 ダイヤルインです。
- * ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。
<http://www.museum.hokudai.ac>

ボランティア・ニュース

編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者:星野、沼田、安田、永山)
発行日:2010年 9月1日
連絡先
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel: 011-706-4706